

まちおこし活動における学生参加の意義と課題

The Significance and Challenges of Student Participation in Town Revitalization Activities

馬 場 祥 次

要約 全国的に一部の都市圏を除き、自治体や地方などではまちおこしが盛んに行われている。八戸市では、市民団体である「八戸せんべい汁研究所」が青森県南地方の郷土料理「せんべい汁」をツールとして、八戸市を全国にアピールし大きな経済効果をもたらしている。本稿では、八戸学院短期大学学生が、八戸せんべい汁研究所の活動に学生サポーターとして参加している、その経緯と意義、課題について述べる。

I. は じ め に

全国各地で、町おこしが活発に行われている中、2003年東北新幹線八戸駅開業を期に、2003年11月2日に八戸市内の有志により「八戸せんべい汁研究所」が設立された。全国的に知られている「ご当地グルメでまちおこしの祭典 B-1グランプリ」(以下 B-1グランプリ)は、八戸せんべい汁研究所が中心となって考案されたまちおこしイベントである。B-1グランプリは、年に1回開催し、開催から10年となった。1年目は17,000人の来場者が、現在では500,000人もの来場者のある、全国的にも有数のまちおこしイベントである。「B-1グランプリ」は、誤解されがちで

はあるが、決してグルメイベントではなく、まちおこしイベントである。まちおこしには様々な形態があるが、「八戸せんべい汁研究所」は、八戸せんべい汁を通して八戸市を全国にアピールし、八戸市を活性化することを目的として活動してきた。このメンバーには、飲食店や製造販売店などのいない純粋なボランティア団体であることも特徴である。

八戸学院短期大学(以下 本学)ライフデザイン学科では、学科の特徴を活かした地域貢献活動ができないか模索をしていた時期でもあり、八戸せんべい汁研究所では若い力が欲しいという時期と重なり、2010年より、

本学ライフデザイン学科の学生を中心に様々なイベント活動や広報活動などに学生サポーターとして参加してきた。まちおこしは継続的な活動が必須であり、そのためには若者の力が必要となっている。

本稿では、八戸せんべい汁研究所の活動の

経緯や内容を述べるとともに、本学学生のまちおこしの活動への参加の経緯や内容、5年を経過し表面化してきた課題などについて述べる。また、学生のまちおこし活動への今後の活動の展望などについても述べる。

II. 八戸せんべい汁研究所の活動

八戸せんべい汁研究所は2003年11月に、2002年東北新幹線八戸駅開業を期に八戸市を活性化すること目的に、八戸市内の有志により結成された。八戸せんべい汁研究所は市民ボランティア団体で、飲食店や南部せんべい製造販売店などの利害関係者が一人もいないという特徴をもっている。これは、利害関係者がいるとまちおこし活動の推進がどうしても遅くなってしまうことが懸念されたためである。12月1日には、早速活動を開始する。「せんべい汁あります」キャンペーンを実施し、八戸せんべい汁タペストリーや八戸せんべい汁提供店マップの配布を実施している。これは、メディアにも取り上げられ、同時に情報発信用にWEBサイト「せんべい汁ドットコム」(<http://www.senbei-jiru.com/>)も開設された。2004年に入ると、八戸せんべい汁研究所公認の「トリオ★ザ★ポンチョス」が歌う、八戸せんべい汁公式応援歌「好きだ Dear!せんべい汁」(現在は、「好きだ Dear!八戸せんべい汁」)が完成し、まちおこしにおいて「料理と歌と振り付け(踊り)」という新しいモデルを作った。この歌は、ラジオ放送によって、青森県内だけでなく県外でも放送され、八戸市民が誰でも聞いたことのある

歌になった。11月には、新潟中越地震災害支援団の活動に参加し、被災地避難所での炊き出しや物資提供等の災害支援活動にも協力している。2005年には、メディアに取り上げられることが多くなり、八戸せんべい汁及び八戸せんべい汁研究所が全国区になる始まりともいえる。2006年2月には、「第1回 B-1グランプリ in 八戸」が開催される。現在10回を数えるB-1グランプリはこの年から始まり、八戸市がB-1グランプリ発祥の地となっている。第1回大会は、全国から10団体を集め八戸市の八食センターにて開催された。来場者数は17,000人であった。出展団体は、富士宮焼きそば学会(静岡県)、横手やきそば暖簾会(秋田県)、鳥取とうふちくわ総研(鳥取県)、小倉焼うどん研究所(福岡県)、青森おでんの会(青森県)、室蘭やきとり逸匹会(北海道)、小浜焼き鯖研究会(福井県)、久留米焼きとり文化振興会(福岡県)と八戸せんべい汁研究所であった。B-1グランプリは、来場者が購入したご当地グルメの箸を投票しその重量で決定する。来場者の投票はおいしさだけでなく、応援したい団体やパフォーマンスなどおもてなし溢れる団体に投票することになっている。つまり、味で

決めるのではなくそれも含めた、団体のまちおこし活動に対して投票するもので単なる食のイベントではない、まちおこしイベントである。また、同時期に「ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会(通称愛Bリーグ)」(以下 愛Bリーグ)が設立された。愛Bリーグは、全国各地の地域資源のブランド化による地域活性化を目指す団体であり、この目的を持った全国の団体・グループが会員となり組織されている。現在は「ご当地グルメで町おこしの祭典！B-1グランプリ」を開催している。この愛Bリーグの設立により、全国の団体の情報交換や連携が飛躍的に進むことになった。この年にはイベントでの提供食数も増え合計28回、7,100食を提供する。また、首都圏での提供が飛躍的に増えこれも「B-1グランプリ」の効果であろう。2007年には、静岡県富士宮市において「第2回B-1グランプリ in 富士宮」が開催された。参加団体数も21団体、来場者は、250,000人とメディアにも多く取り上げられるようになる。八戸せんべい汁研究所の活動はこれだけではなく、八戸市内の水産加工品メーカーとの共同開発による「八戸せんべい汁コク塩」や八戸市内のホテルとの共同で「冷製八戸せんべい汁」を開発、八戸せんべい汁のブランド商品化を押し進めている。また、首都圏では、「八戸せんべい汁アカデミー」をマスコミ関係者、旅行エージェント、飲食店関係者向けに開催し、八戸せんべい汁を大きくアピールしている。この年のイベント等での提供回数は33回、7,230食を提供した。2008年には、11月に福岡県久留米市で「第3回B-1グランプリ in 久留米」が開催された。24団体が参加し、来場者は203,000人である。12月には、八戸

市八食センターにて「B-1グランプリ冬の陣 北東北大決戦」を開催している。この年のイベント等での提供回数は23回、8,130食を提供している。また、この年になると地域での南部せんべいを活用した新しい料理の開発も増加し、八戸せんべい汁研究所も支援を行っている。2009年には、秋田県横手市で「第4回B-1グランプリ in 横手」が開催され、参加団体は26団体、来場者数は267,000人であった。横手市の人口が約95,000人に対しその2.8倍もの来場者が訪れたことになる。これだけでも大きな経済効果があることは明らかである。八戸せんべい汁研究所では、B-1グランプリ発祥のプライドをもち次々に新しいパフォーマンスを考え出している。この年は、体験型パフォーマンスとして、「八戸せんべい汁紙芝居」と「おつゆせんべいべ〇ツ割り体験」を実施、来場者に楽しんでもらう企画を考案、実施した。この年にはイベント等での提供回数が23回、21,570食を提供し、ご当地グルメが全国で大人気となり、食イベントの巨大化がはじまった。2010年には、イベントは益々巨大化し、神奈川県厚木市で「第5回B-1グランプリ in 厚木」が開催され、参加団体は46団体と増大し、来場者も435,000人と倍増した。八戸せんべい汁研究所も応援隊を含め62名で参加している。この大会で参加した関東在住のメンバーを中心に、「八戸せんべい汁研究所関東サポーターズ倶楽部」が40名で設立された。10月には、秋田県横手市において愛Bリーグ支部による「北海道・東北B-1グランプリ in 横手」が開催される。この大会より本学の学生がまちおこし活動に積極的に参加することになり、八戸せんべい汁研究所に若い力が加

わった。メディアでも大きく取り上げられ全国でも話題のイベントとなり、八戸市出身で東京在住の作曲家澤口和彦氏の協力により、八戸せんべい汁研究所応援ソング「進め！㊤～汁”魂（じるだまし）～」が完成し、八戸市民がコーラスに参加する形でレコーディングを実施した。この年のイベント等での提供回数は17回、36,600食を提供している。また、この年には郷土料理「せんべい汁」を全国発信し、B級グルメブームの火付け役となったとして「第39回デリー東北賞（デリー東北新聞社）」を受賞している。2011年には、東日本大震災が発生し八戸市でも大きな被害に見舞われた。愛Bリーグでは被災地支援活動を10月まで実施し、八戸せんべい汁研究所も積極的に被災地で炊き出しや物資提供などを実施している。6月には総務省より、「八戸せんべい汁による経済波及効果」が、2010年度で563億円と発表され八戸市民を驚かせた。11月には、兵庫県姫路市にて「第6回B-1グランプリ in 姫路」が開催され、参加団体63団体、来場者数515,000人と巨大なイベントとなった。この年から本学学生がB-1グランプリの本大会(全国大会)に参加するようになる。八戸流おもてなしとして「汁”研身代わりシスターズ」を考案し並んでいる来場者が、トイレに行きたくなった際に身代わりに並ぶサービスを実施し、大好評でメディアにも大きく取り上げられた。この年のイベントでの提供回数は26回、25,550食を提供した。また、「第19回あおぎん賞（青森銀行）」「地域づくり総務大臣表彰・団体表彰（総務省）」を受賞した。2012年には、福岡県北九州市で「第7回B-1グランプリ in 北九州」が開催され、参加団体63団体、

来場者数610,000人とこれまでで最も多い来場者数を記録した。ここで八戸せんべい汁研究所は、苦節7年、ついにゴールドグランプリを獲得した。第6回大会では「汁”研身代わりシスターズ」を実施した八戸流おもてなしであるが、第7回大会ではこれに加え新たに、「汁”研イケメンふうふうボーイズ」を考案実施した。八戸せんべい汁研究所の取り組みは、イベントだけではない。秋田県仙北市立神代小学校の修学旅行生を受け入れ、南部せんべいの手焼きや八戸せんべい汁の調理を体験してもらった。また、「第1回八戸せんべい汁おもてなしアカデミー」を開催し、八戸せんべい汁研究所の取り組みやおもてなしの心などを飲食店等の方々に学んでもらい、「八戸せんべい汁おもてなしマイスター」として地域に八戸せんべい汁を広める活動をしている。この年ゴールドグランプリを獲得したことにより、市内のせんべい店には注文が殺到し生産が追い付かず八戸市内の店舗でもおつゆせんべいが入手困難になった。イベント等での提供は23回、27,520食提供した。また、「地域再生大賞優秀賞（地方新聞社46誌と共同通信社）」を受賞している。2013年には、3月に「第2回八戸せんべい汁おもてなしアカデミー」を開催し、青森県外からの参加者を含め20名のおもてなしマイスターが誕生した。また、八戸市内の八戸せんべい汁おもてなしマイスターのいる店を掲載した、「八戸せんべい汁おもてなしマイスターマップ」を作成し配布を実施している。11月には、愛知県豊川市で「第8回B-1グランプリ in 豊川」が開催され、参加団体64団体、来場者581,000人を数えた。八戸せんべい汁研究所は殿堂入りまちおこし団体として投票

対象外ではあったが、行列を制限せざるおえない大盛況となった。八戸流おもてなしとして、新たに「八戸せんべい汁”バーシート」で高齢者や妊婦、障害のある方に行列で待っている間に座ってもらうおもてなしを披露した。また、秋田県仙北市立神代小学校、北海道札幌市立厚別東中学校からの修学旅行生を受け入れ、八食センターで八戸せんべい汁の作り方の実習指導とPRを実施した。2014年には、福島県郡山市にて、「第9回 B-1 グランプリ in 郡山」が開催され、参加団体59団体、来場者数453,000人であった。また、「第3回八戸せんべい汁おもてなしアカデミー」が開催され、25名が「八戸せんべい汁おもてなしマイスター」に認定された。また、新たに八戸市内の小中学校を対象として「八戸せんべい汁研究所まちおこし出前講座」を実施し、まちおこし活動の意義や楽しさ、やりがいや、地域の魅力を良く知り、それを楽しみながら発信してまちを元気にすることを小中学生に伝え、次のまちおこしの担い手育成に取り組んでいる。2015年には、B-1 グランプリ in 十和田が開催されることもあり、八戸せんべい汁研究所は準ホスト団体の意識をもって、八戸駅や八戸市内各所に「おもてなし短冊」に記入してもらいそれを飾った。そして、「第10回 B-1 グランプリ in 十和田」が開催され、参加団体62団体、来場者数334,000人の予想を上回る盛況であった。また、これからのイベントやまちおこしのため

のプロジェクトがはじまった。これには本学学生のほか、市内の高校生も参加している。

このように、現在まで様々なまちおこし活動を行っている八戸せんべい汁研究所であるが、主な活動内容を記述する。

八戸せんべい汁研究所の構成メンバーは、正規会員33名とサポーターズクラブ会員46名、関東サポーターズ倶楽部44名の123名で構成されている。活動は正規会員を中心にサポーターズ倶楽部のメンバーが様々なイベントや活動に参加する形で行われている。首都圏方面のイベント等では、関東サポーターズ倶楽部と正規会員が中心に活動を行っている。

主な、活動内容はイベントの他に多岐に渡っている。「八戸せんべい汁研究所 / まちおこし出前講座」、「八戸せんべい汁観光タクシー」（汁”タク）、「八戸せんべい汁飲食店ガイドマップ2014年版」の制作・配布、「汁”研の活動展示」によるアピール、「まちおこし活動応援メッセージBOX」の設置、「八戸せんべい汁おもてなしアカデミー」の開催、などが挙げられる。また、各企業や団体とのタイアップ事業も実施している。コンビニ大手とのタイアップ商品の企画・開発や八戸市内の企業との商品開発なども実施している。おもてなし活動やまちおこしとしての講演活動も盛んで、年間約30本程の講演を実施、また大学生の研究活動のためのヒアリングなどにも積極的に応じている。

III. 八戸せんべい汁研究所の活動への学生参加

本学ライフデザイン学科は、2006年4月に開設され「将来に対する明確なビジョンを

持ち、社会に貢献できる行動力、理論的に問題解決ができる思考力を養い、資格取得に直結する科目を履修することで、自己のライフデザインと職業観の確立を目指す。」を教育理念としている。ライフデザイン学科では、1年に一度ボランティアデーという地域貢献を目的とした行事を行っているが、恒常的に地域貢献ができないか日々検討をしていた。2010年のボランティアデーにおいて、市内に出かけることの少ない高齢者施設や障害者施設の方々を八戸市中心部に招き、一緒に散策したり昼食を食べたりする企画を実施した。その際まちおこし団体として昼食の提供をしていたのが、八戸せんべい汁研究所であった。これを機に八戸せんべい汁研究所と連携をとり、まちおこし活動に学生が参加することになった。学生の初めての活動は、2010年10月、秋田県横手市で開催された「北海道・東北B-1グランプリ」であった。学生に参加募集を募ったところ、始めは「めんどくさい」、「まちおこしがわからない」など否定的な学生が多かったが、「宿泊できる」「費用がかからない」などの本来の目的とは違う形での参加となった。何をやるかわからないが、取り敢えず修学旅行気分では学生たちは、参加したのである。八戸せんべい汁研究所にとっても若者が町おこし活動に参加するのは歓迎であったはずではあるが、学生の行動には不安を持っていたであろう。短期大学生とはいっても、高校を卒業したばかりの若者であり、地域貢献など頭にもない学生たちをイ

ベントに放すわけにはいかず、教員が引率して参加することにした。教員が率先してイベント活動をし、学生をけん引する役目を果たすことで、学生たちに本来の意味や学生たちに学んでほしいことを体感させたかったからである。結果、イベントでは、学生たちは率先して活動し、八戸せんべい汁研究所のメンバーが驚くようなアイデアを出し実践したりすることができ、「まちおこしに若者の力は必要だ」と改めて感じさせることとなった。学生たちは、イベントだけでなく、八戸市内の飲食店への募金箱設置やパンフレット配布などにも参加している。また、2011年東日本大震災の際には、被災地支援として宮城県石巻市を訪れ、炊き出しや物資配給を行ってもある。この時は女子学生もいたが、野宿覚悟であった。被災地の悲惨な状況や避難所の人々と触れ合った経験は大きなものとなっている。2010年の活動開始から、1年生は、八戸市内の活動を中心に学習してもらい、2年生は自ら考え行動できるため、県外イベントへも積極的参加するように設定した。2011年からは、B-1グランプリ本大会にも参加している。2012年からは、「八戸せんべい汁おもてなしアカデミー」が始まり、1年生は、受講生として「せんべい汁の歴史」から「八戸せんべい汁研究所の活動」、「愛Bリーグの活動」、「著作の問題」などを学習し、2年生からはそれを踏まえてイベントや様々な活動に参加している。

IV. まちおこし活動への学生参加の意義

本学ライフデザイン学科では、地域貢献できる行動力を養うことを一つの目標としている。八戸せんべい汁研究所への活動参加は、まさに地域に貢献しこれからの地方を担う若者たちに必要なものであろう。学生がイベント等に参加することにより、一般社会に直接触れることになる。学校というある意味閉鎖された社会の中で普段生活している学生が、一般社会人の人と触れ合うことで、様々な考え方、常識、礼儀作法などを自然に学ぶ。八戸せんべい汁研究所のメンバーは、多種多様な人がいる。企業経営者、自治体関係者、会社員、就職活動中の者、教員など、これらの人たちは、すべてボランティアとして自分の立場を捨てて同じ目線で活動している。この様々な社会人の人たちと触れ合うことが学生を成長させている。また、学生も社会人も一人のまちおこしメンバーとして活動するため、自然に自分から仕事を探し、自ら行動するようになる。実際に八戸せんべい汁研究所のメンバーからは、「2年生になると見違える。1年の時とは全く違って素晴らしいね。」

との声が多く聞かれる。また、学生がまちおこし活動に参加することにより、地域を実学で学ぶよい機会になる。今の学生は、自分の生活している地域のことを案外知らないもので、普段口にしていないせんべい汁の歴史や種類など全く知らない学生が多い。イベントなどで来場者に様々な質問をされるため、自然に地域のことを学習して自信をもって答えられるようになっていく。そういった過程の中で地域をよく理解し、誇りを持つことがで

きるようになることが、学生にとっても地域にとっても重要である。社会に一度出てそれからまちおこしに取り組もうという人たちもたくさんいるが、学生の内にそれをある程度経験させ、社会に送り出すことによってまちおこしを継続して活動できることになると考えている。

現在は、小・中学生や高校生が町おこしに積極的に活動し始めているが、この活動は大学生の活動の意味合いとは少し違う。高校生は、高校の時は活動に積極的であるが、卒業すると進学や就職で活動を継続することが難しい。地域を離れたたり、就職1年目からまちおこし活動に参加することはなかなか難しいものである。その点、短大生は、入学生のほとんどが地元出身者で、卒業後の進路も地元が多い。これは、地域にとっては重要な人材である。学生の時に経験し、継続して地元地域でまちおこし活動に参加する。まさに即戦力である。本学学生が、町おこし活動に参加することは、町おこしを継続して行うことでも大きな意義があるであろう。

学生にとっては、多くの人たちとの交流が盛んになる。自分の知らない全国の地域の人たちとの交流で、考え方や言葉などたくさんのことを学ぶことができ自分のこれからのライフデザインにも有益になるであろう。また、自分の参加する団体のメンバーとの交流の中で、就職に関する情報や企業の情報なども得られることも多い。中には就職活動を応援してくれるメンバーもいたり、学生生活にとっても有意義な活動となっている。

V. まちおこし活動への学生参加の課題

まちおこし活動に学生が参加して6年になるが、その中でも課題も見えてきた。その一つは、学生がすべてのイベント等に参加できないことにある。八戸せんべい汁研究所は日頃多くのイベントや活動を行っているが、その日程はほとんどが土、日曜日である。学生はアルバイトをしている学生が多く、なかなか日程調整ができず参加できない場合が多い。筆者は、学生に大きなイベントだけでなく、地元での活動に多く参加して地域を知り、人を知り、たくさんのことを学んで全国にPRしてもらいたいと思っているが現状ではうまく調整ができていない。

学生がまちおこし活動に参加したあと、卒業してからもまちおこし活動に参加してほしいと、八戸せんべい汁研究所も筆者も熱望しているところではあるが、実際は就職してからまちおこし活動に参加する卒業生は数名に留まる。これは、就職1年目で休暇の日程を調整しにくく参加が困難であり、その内にまちおこしへのモチベーションが上がらなく

なってしまうことが多いようである。しかし、少しでも空いている時間を利用して参加しようとする卒業生もいる。また、卒業して数年後からまた参加したいとの卒業生もいる。潜在的には卒業してからもまちおこし活動に参加したい卒業生はいると思われるため、このような卒業生をどのように活動に導くかが大きな課題である。

筆者は、学生がイベント参加するに当たり、少し時間をとって他の団体の活動を体験させたいと思っているが、実際は忙しくそのような時間はとることができない。学生には、沢山の団体の活動を見て自分の活動する団体の今後の活動や方向性を見出してほしいと思う。それが、まちおこしの継続性や今後まちおこし団体の発展につながると思っているからである。

学生のまちおこし活動への参加は、希望者を募って参加しているが、その年によって人数にはばらつきがある。安定して参加者を出すためにも工夫が必要である。

VI. ま と め

市民ボランティア団体である八戸せんべい汁研究所が2003年に活動を始めて、12年が経過する。この間八戸市にも大きな経済効果をもたらし、江戸時代からの郷土料理を「八戸せんべい汁」としてブランド化し全国に発信を続ける活動は、八戸市の誇りであるといってもいいであろう。まちおこしは、一定の期間で終わるものではなく、長く続けるこ

とが必要であることは言うまでもない。八戸せんべい汁研究所事務局長の木村聡氏は、2012年「B-1グランプリ in 北九州」でゴールドグランプリを獲得した際、閉会式の会場で「まちおこしに終わりなし」の名言を残した。しかし、長く続けるには若い力が必要であり、学生が参加し、その後継続してもらうことが重要なポイントとなる。「B-1グラン

プリ」も開催から10回を数え一つの区切りを迎えている。まちおこし団体も徐々に高齢化が進んでいることは否めない。若者が中心となり新たなまちおこし活動を積極的に実施するためにも自治体、企業、教育機関、市民などあらゆる面で協力とバックアップが必要である。八戸せんべい汁研究所は、小学校や中学校にも出向き「おもてなし講座」を始めている。高校生も活動に参加してもらえるようになってきた。着実にまちおこしは進んでいると思うが、若者がイベント等の活動に参

加するだけでなく、まちおこし団体の中心として、企画や実行をすることが大事である。そのために本学学生をどのように活動に参加させていくか今後検討していきたいと思っている。

最後に、学生の参加を快く引き受け、また活動中も学生に楽しく活動させていただいている八戸せんべい汁研究所の皆様、全国の愛Bリーグ団体の皆様に深く感謝を申し上げます。

<参考文献>

1. 八戸せんべい汁研究所 「活動記録 2003～2013 八戸せんべい汁研究所」八戸せんべい汁研究所 2014
2. ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会 「愛Bリーグ」 ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会 <http://www.ai-b.jp/>
3. ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会 「過去のB-1グランプリ」 ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会 <http://b-1grandprix.com/>